

手話だより

令和4年度7月号

一学期も終わり、楽しみに待っていた夏休みが始まります。熱中症に気をつけて、有意義な時間をお過ごしください。二学期からまた、みなさんと楽しく手話を使って交流できればと思います。この「手話だより」では、手話や聴覚障害などに関する情報を発信します。皆さんが「へえ～！」「面白い！」と思ってくれるようにしていきたいと思います。今年度もよろしくお願いいたします。

手話・情報保障部一同



授業時の配慮ポイント ～情報保障の観点から～

「情報保障」とは、『人間の「知る権利」を保障するもの』です。聴覚障害のある方々は、音声だけでは十分に情報を得られないことがあるので、視覚情報が必要になります。

手話情報保障部から、毎年新任の職員向けに「授業時の配慮ポイント～情報保障の観点から～」についてお話をしています。手話・情報保障部職員が製作したパワーポイント(動画)をもとに説明します。子どもたちにとって分かりにくい例とポイントを意識した例を示すことで、障害に応じたより具体的な配慮ポイントを意識して授業を進めていくようにしています。

①ながら説明はしない

例①書きながら説明

- ・黒板に向けて話していると、口元(口型)が見えなく、理解しにくい

例②動きながら説明

- ・話し手が動いていると、集中して見る・聞くのが難しく、理解しにくい

②視覚的に分かりやすく

例①マスクを付けて話している

- ・マスクを付けていると、口元(口型)が見えなく、理解しにくい

例②視覚情報が少ない

- ・視覚情報(文字・イラストなど)がない、少ないと理解できない時もあります

授業のポイント ～情報保障の観点から～

③注目させてから話す

例①生徒が書いている時に話しかける

- ・「見る」「聞く」と同時に「書く」「作業する」のは難しい

④話し手は太陽に背を向けない

話し手が太陽に背を向けている

- ・座っている幼児児童生徒はまぶしくて、話し手の顔が見えない

しかし、社会に出ると、子どもたちは「自分から手話通訳を依頼する、情報保障をお願いする」ことが必要になってきます。聾学校の時から自立活動等の授業などで学習し、依頼方法を覚えて実行できるようになるといいですね！



ブラジル デフリンピックに参加して



加賀 充 DEAFLYMPICS

5月1日～16日に、ブラジル デフリンピックに日本代表デフバレーボール選手として参加しました。参加して、衝撃または印象的だったことが2つあります。



1つ目は、日本の文化であるアニメは世界共通だったことです。特に、「鬼滅の刃」「ハイキュー」「ナルト」が好きな世界ろう者がたくさんいました。ハイキューのキーホルダーを持っていると自慢してきたウクライナ人や、鬼滅の刃のコスプレを着ていたブラジル人、ナルトのポーズ(忍者ポーズ)をしてナルトが好きだというイタリア人が、日本人である私たちにアピールしてきました。

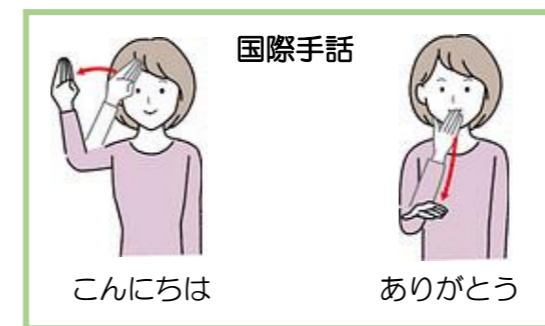
また、私は偶然ハイキューのキーホルダーを持っていて、現地のろう者のブラジル人が持っているバッジと交換すると、とても喜んでいました。

それくらい日本はアニメの王国であることが実感させられました。



2つ目は、世界のろう者には様々な手話言語があることです。

ウクライナ手話、コロンビア手話、ポルトガル手話、アメリカ手話、イタリア手話などの手話があり、異なっていました。コミュニケーションをとるのにとても苦労しました。しかし、手話言語が異なってもコミュニケーションがとれるようにするために、国際手話があります。デフリンピックには3回出場したため知っている挨拶程度の国際手話を使うことで、世界のろう者とのコミュニケーションがとれ、とても楽しかったです。世界のろう者は表情が豊かで、表現力も柔らかくて内容がわからなくても伝えたい気持ちが伝わってきました。手話は国境を越えた素晴らしいコミュニケーションであると感じました。



以上が、私がブラジル デフリンピックに参加して、衝撃または印象的だったことです。男子バレーボールの結果は、日本選手団の中にコロナ感染者が増加したため途中棄権になりましたが、貴重な経験をさせていただきました。応援していただきありがとうございました。